

宋代揚州研究の現状と課題

田 佳

大阪市立大学大学院 文学研究科 哲学歴史学専攻
東洋史学専修 後期博士課程 1年生

keywords: 宋代, 揚州, 都市空間, 地域史

1. はじめに

唐代後半期から、揚州の都市経済は空前の繁栄をみせた。唐末、北宋末、元末、明末四度の戦争に襲われ、揚州は何度も荒廃したが、清代になって再び繁栄した。唐代、明代の繁栄の盛況に比べて、その間の宋代の揚州はやや衰退していた時期と一般には評価されている。しかし、宋代の経済史と都市史研究は古くより研究者の関心を集めたのに対し、これまで宋代揚州に関する専論は見られない。本報告では宋代揚州に関する研究史を整理し、そこから課題を指摘し、最後に史料と研究視角を中心に今後の展望を述べる。

2. 先行研究の回顧

宋代における揚州研究については、今までの研究では宋代揚州経済と都市という二つの側面を集中的に分析することが多かった。揚州経済に関する研究から見ると、研究者は自然地理環境、港口、戦争、水利、経済重心など異なる面に重点を置き、宋代の揚州経済の衰退原因を検討してきた。商業、農業などの検討は多少触れられているが、未だ十分ではない。一方で都市に関する研究を見ると、揚州城の城壁形制、周辺都市の規模、都市建設などの問題および唐、宋、明三朝における揚州城の沿革に集中することが多く、唐代から宋代までの揚州の州城の規模がどのように変化していったかについては明らかになった(図2)。しかし、両宋間において、揚州の都市空間、淮南地区の変化が揚州にどのような影響などの課題は未解明のままである。

3. 史料について

まず、文集などの利用が考えられる。文集は豊富な内容を包含しており、揚州に関わる上奏文、記、序、題跋、詩文、書信などを利用して全面的に分析することで、揚州の全貌を把握できる可能性がある。

次に碑刻など現物資料の利用があり、碑文を上述史料の補足資料として使用する。碑文が編纂された時期、編纂内容、編纂内容の元となる史料、さらには地方志、文集の史料と碑文の関係などを探っていく。

4. 研究の視点について

一つ目は空間の視点である。平田茂樹は宋代政治史研究において「政治空間」の方法概念を提案した。この視点を参考にし、揚州を、都市空間の中核としての様々な施設がどのような機能を持ち、都市制度、都市空間、人間のネットワークなどの問題がどのように関係しているのか、という空間視点を設定する。平田は特に文集所載の題跋、序、記、書信などの利用を積極的に提言する。

また、具体的な宋代都市空間分析としては、山崎覚士の明州（現在の寧波）研究が参考となる。以上の二人の研究を参考にすれば、地方志、石刻資料、文集などの史料を利用して、都市空間とその構造を復元し、その諸特徴を探る可能性があることを示してくれる。

二つ目は広域地域史研究の視点である。報告者は主に張勇の宋代淮南地区研究の成果を参考にしている。報告者は宋代揚州それ自身に目を向けるとともに、揚州を包含する淮南地区、即ち広域地域へと目を向ける必要があると考えている。報告者は淮南地区の問題の変化を検討することを通じて、広域地域が個別の地方都市にどのような影響が及ぼし、どのような現象を出現させたのかを明らかにし、最後に、両宋時代の国家体制の転換と揚州との関係性を捉えていくことを目指す。



図1：淮南東路（譚其驤主編『中国歴史地図集』第6冊、中国地図出版社、1996年より）

図2：揚州城池（中国社会科学院考古研究所等『揚州城遺址考古發掘報告1999～2013年』、科学出版社、2015年より）

参考文献

平田茂樹（2012）『宋代政治構造研究』汲古書院

須江隆編（2012）「寧波方志所載言説考—寧波の地域性と歴史性を探る」、『碑と地方志のアーカイブズを探る』東アジア海域叢書第六巻 汲古書院

包偉民（2014）『宋代城市研究』中華書局

山崎覚士（2019）『瀕海之都—宋代海港都市研究』汲古書院

張勇（2019）『宋代淮南地区開発若干問題研究』中国社会科学出版社